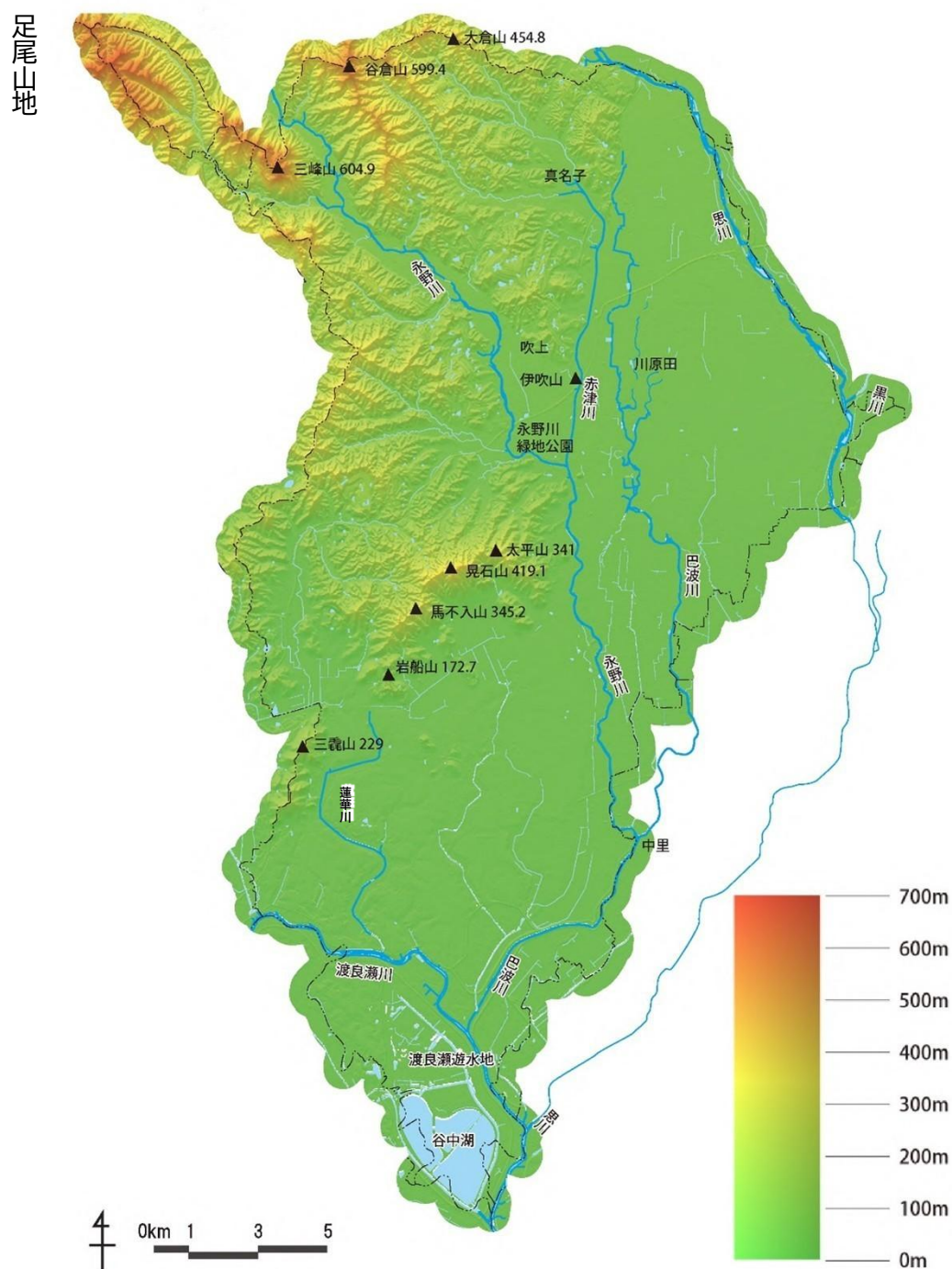


(2)地形

本市の地形は、北東部から南西部に平地が広がり、北西部に平地から緩やかに高度が増す丘陵地が形成され、その丘陵地よりさらに北部及び中央から西部にかけて、標高が高く起伏の大きい山地が広がっています。北部の山地に^{おおくらやま やぐらさん みつみねさん}大倉山・谷倉山・三峰山が、中央から西部の丘陵と平地の境に^{おおひらさん てるいしさん うまいらずさん いわふねさん みかもやま}太平山・晃石山・馬不入山・岩船山・三義山といった山々が連なっています。また、市内に^{おもいがわ ながのがわ}思川・巴波川・永野川・赤津川・渡良瀬川の河川が流れています。



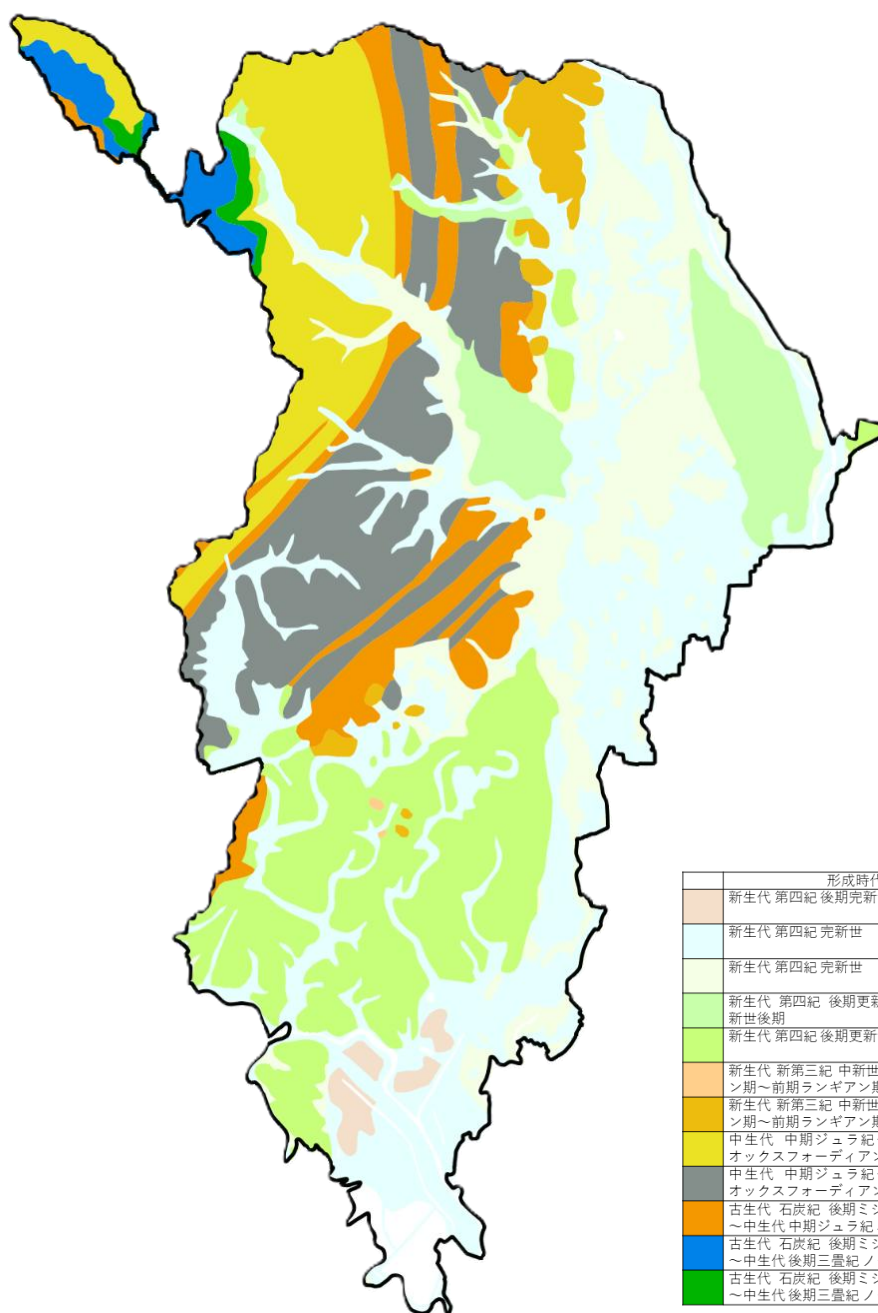
出典：栃木市歴史的風致維持向上計画

栃木市地形図

(3)地質

本市の山地は、古生代(約5億 4,200 万年前から2億 5,190 万年前)に形成された玄武岩、石灰岩、チャート(※)を基盤とし、さらに中生代(約2億 5,190 万年前から6,600 万年前)に形成された砂岩などから構成されています。一方、平地は新生代第四紀(約 258 万 8,000 年前から現在)のうち、後期更新世(約 12 万 6,000 年前から1万 1,700 年前)に形成された段丘堆積物が見られ、さらに完新世(約1万 1,700 年前から現在)にかけて堆積した谷底平野や自然堤防が形成されています。古生代から中生代にかけて形成された岩は、プレートや造山運動によりひずみ、持ち上げられて山地となりました。

※ チャート:放散虫という海の生物などの殻がたまってきた石



形成時代	大区分	岩相
新生代 第四紀 後期完新世	その他	盛り土・埋立地・干拓地
新生代 第四紀 完新世	堆積岩	谷底平野・山間盆地・河川・海岸平野堆積物
新生代 第四紀 完新世	堆積岩	自然堤防堆積物
新生代 第四紀 後期更新世中期～後期更新世後期	堆積岩	段丘堆積物
新生代 第四紀 後期更新世前期	堆積岩	段丘堆積物
新生代 新第三紀 中新世 パーディガリアン期～前期ランギアン期	堆積岩	海成層 礫岩
新生代 新第三紀 中新世 パーディガリアン期～前期ランギアン期	火成岩	安山岩・玄武岩質安山岩 溶岩・火砕岩
中生代 中期ジュラ紀～後期ジュラ紀 オックスフォードアン期	付加体	海成層 砂岩 中期-後期ジュラ紀付加体
中生代 中期ジュラ紀～後期ジュラ紀 オックスフォードアン期	付加体	混在岩 中期-後期ジュラ紀付加体
古生代 石炭紀 後期ミシシッピアン亜紀～中生代 中期ジュラ紀 パジョシアン期	付加体	チャート 中期-後期ジュラ紀付加体
古生代 石炭紀 後期ミシシッピアン亜紀～中生代 後期三疊紀 ノーリアン期	付加体	海成層 石灰岩 中期-後期ジュラ紀付加体
古生代 石炭紀 後期ミシシッピアン亜紀～中生代 後期三疊紀 ノーリアン期	付加体	玄武岩 海洋 中期-後期ジュラ紀付加体

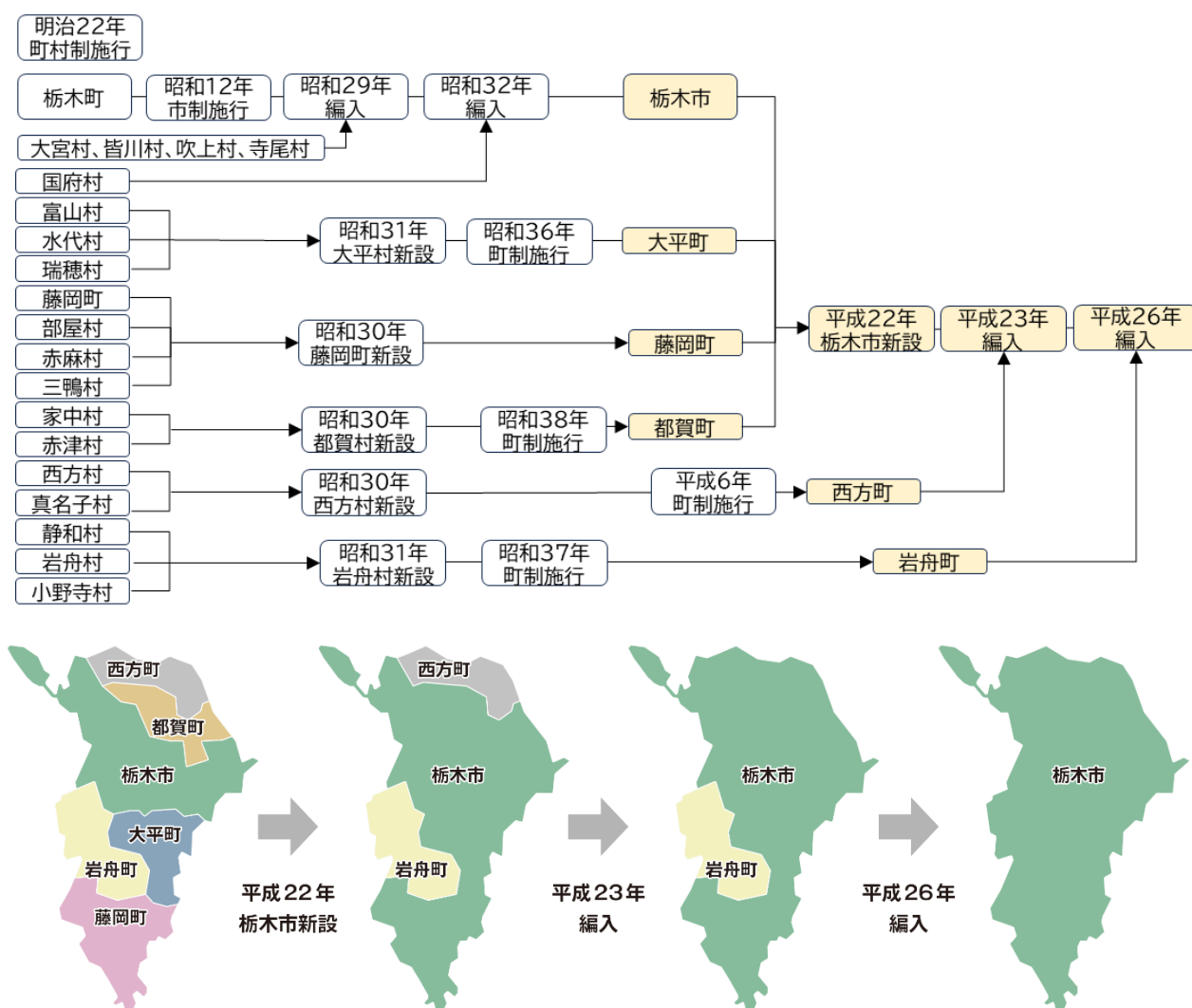
参考:20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2(©産総研地質調査総合センター)
 栃木県の地質図

(4)合併の経過

明治 22(1889)年に^{とちぎまち}栃木町、^{おおみや}大宮村、^{みなかわ}皆川村、^{ふきあげ}吹上村、^{てらお}寺尾村、^{こう}国府村、^{とみやま}富山村、^{みずしろ}水代村、^{みずほ}瑞穂村、^{ふじおか}藤岡町、^{へや}部屋村、^{あかま}赤麻村、^{みかも}三鴨村、^{いえなか}家中村、^{あかつ}赤津村、^{にしかた}西方村、^{まなご}真名子村、^{しずわ}静和村、^{いわふね}岩舟村、^{おのてら}小野寺村が町村制を施行しました。

現在の栃木市の各地域の基礎ができあがっていくのは、昭和 32(1957)年の栃木市への国府村の編入から始まります。その後 1960 年代に入ると、村の町制施行が相次ぎ、昭和 36(1961)年に大平町が、昭和 37(1962)年に岩舟町が、昭和 38(1963)年に都賀町が誕生しました。そして平成6(1994)年の町制施行により西方町が誕生し、このときの行政区分が、現在の栃木市における各地域区分となっています。

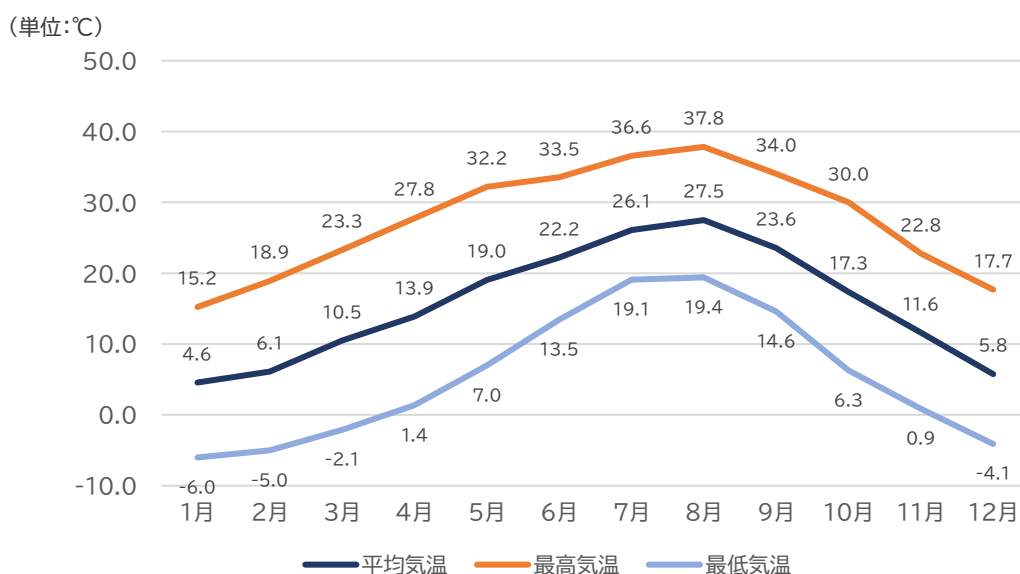
そして、平成 11(1999)年に「市町村の合併の特例に関する法律」が改正されたことで、市町村合併が相次いだ「平成の大合併」の最後の年である平成 22(2010)年に、栃木市、大平町、藤岡町、都賀町の1市3町が合併して、栃木市が誕生しました。その後、平成 23(2011)年に西方町、平成 26(2014)年に岩舟町が編入され、現在の栃木市となりました。



(5)気候

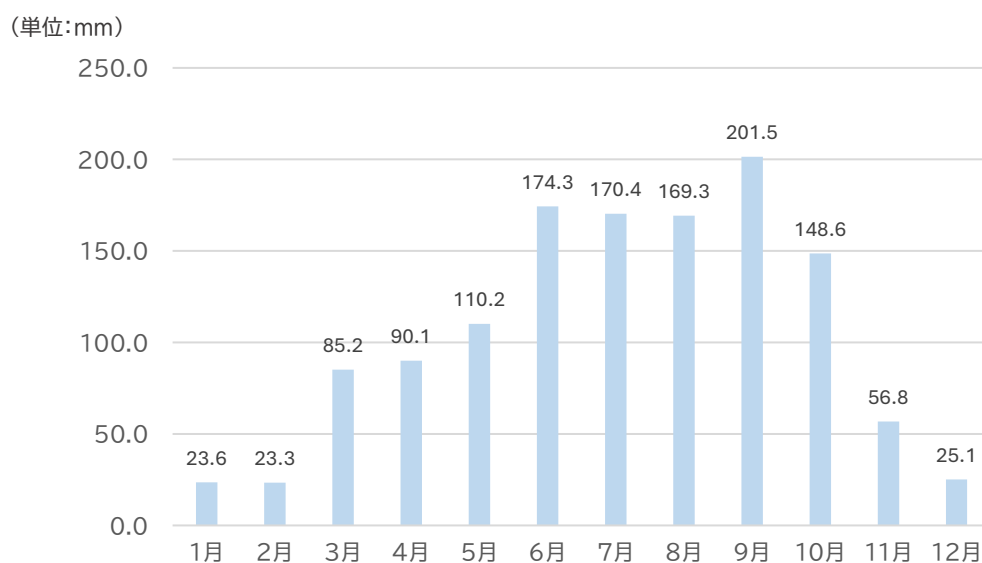
本市の気候は、夏季に降水量が多く、冬季に少ない太平洋側の気候に属しており、過去 10 年間の9月降水量は 201.5mm に対し、2月は 23.3mm です。また、内陸部に位置するため、夏季と冬季の寒暖差が激しく、過去 10 年の年間平均気温は 15.7℃で、最高気温は8月に 37.8℃、最低気温は1月に -6.0℃をそれぞれ記録し、その差は 43℃を超えます。近年の年間平均降水量は 1,300mm 程度です。

北関東地方は、夏季に太平洋側から吹く風が山地で上昇気流を起こすことで雷雲が発生しやすく、落雷の多発とともに局地的に激しい突風や豪雨をもたらします。したがって、本市においても夏季に落雷と局地的な豪雨が多発します。冬季は、^{なんたい}男体おろし、^{あかぎ}赤城おろしなどと呼ばれる北西からの強い季節風が吹き、平地は乾燥した冬晴れの日が続きます。



※平成 29 年 8 月～11 月は計器の故障により測定不能のため、データなし。

月別平均気温・最高気温・最低気温（平成 27（2015）年～令和 6（2024）年平均）



出典：栃木市統計情報

月別降水量（平成 27（2015）年～令和 6（2024）年平均）

2. 社会的状況

(1)人口推移

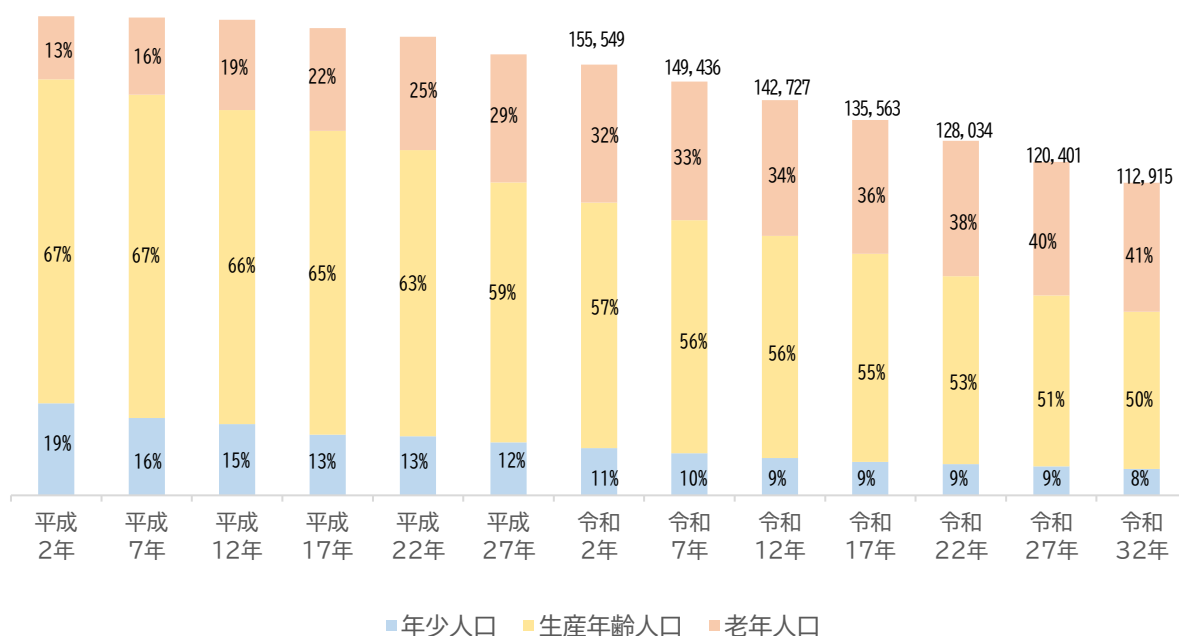
本市の人口は、令和8(2026)年3月現在、151,170 人です。平成2(1990)年の 174,717 人をピークに減少に転じ、令和2(2020)年は 155,549 人でした。国立社会保障・人口問題研究所(社人研)が令和5(2023)年に公表した推計によると、本市の人口は今後減少傾向が続き、令和32(2050)年は 112,915 人まで減少すると予測されています。

本市の年齢3区分別人口をみると、生産年齢人口(15～64 歳)は平成2(1990)年をピークに減少に転じています。一方、老年人口(65 歳以上)は増加傾向にあり、人口に占める割合が平成7(1995)年は 16%となり高齢社会(※1)に、平成 17(2005)年に 22%となり超高齢社会(※2)に突入しました。

今後の予測は、老年人口は横ばいになるものの、生産年齢人口と年少人口(0～14 歳)の減少が進み、令和32(2050)年に高齢化率が 41%となって、1.3 人で1人の高齢者を支える社会になると見込まれます。

※1 高齢社会 65 歳以上の高齢者の割合が人口の 14%を超えた社会のこと

※2 超高齢社会 65 歳以上の高齢者の割合が人口の 21%を超えた社会のこと



[実績値]国勢調査、[推計値]国立社会保障・人口問題研究所(令和5(2023)年推計)

※構成比は端数処理を行っているため、合計が 100 にならない場合があります。

人口・年齢3区分別人口の推移と推計

(2)交通

本市の道路交通は、首都圏と東北方面を南北に結ぶ「東北縦貫自動車道」に、「佐野藤岡」、「栃木」、「都賀西方」の3つのインターチェンジがあり、東西に走る「北関東自動車道」に「都賀」インターチェンジがあります。これら2つの高速道路は、群馬方面からは「岩舟ジャンクション」、茨城方面からは「栃木都賀ジャンクション」によって接続され、広域的な道路ネットワークが形成されています。

また、南部は北関東3県を結ぶ「国道50号」、北部は足利市や宇都宮市に至る「国道293号」が走り、県内外とのアクセスが容易です。

鉄道は、東武日光線及び東武宇都宮線(10 駅)と JR 両毛線(3駅)があり、市内や近隣自治体への通勤通学の足として、また、東京、埼玉方面への交通手段として充実しています。

その他の交通手段は、民間路線バス1路線のほか、ふれあいバスの愛称で親しまれている市コミュニティバスや蔵タクの愛称で知られるデマンドタクシーがあり、通勤通学等の日常生活の足として、また市内観光の移動手段として運行されています。



出典：栃木市歴史的風致維持向上計画

栃木市交通網図

(3)産業

本市の令和2(2020)年の就業者総数は、76,181人です。農林漁業の第1次産業は、4,126人(5.4%)、輸送機械や電気機械製造業を中心とする第2次産業は25,264人(33.2%)、卸売業・小売業やサービス業などの第3次産業は45,456人(59.7%)です。

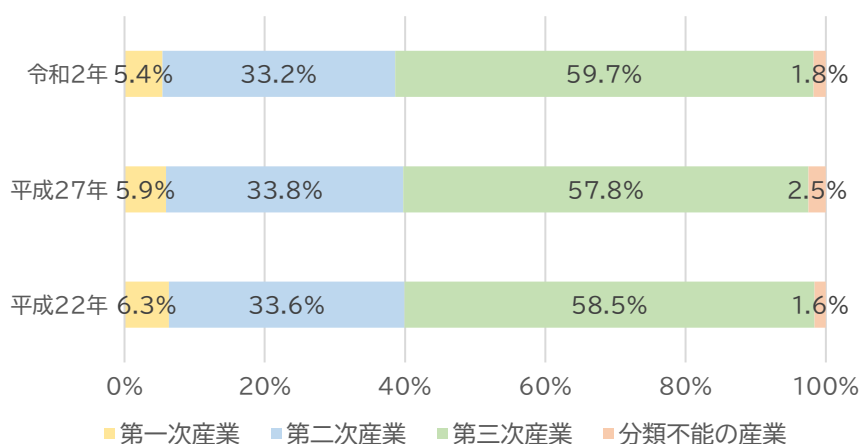
就業者総数は平成22(2010)年から令和2(2020)年の11年間で2,951人減少しており、産業別就業者数割合は、一貫して第3次産業が主体です。

産業別就業人口の推移

(単位:人)

	第1次産業	第2次産業	第3次産業	分類不能※	就業者計
平成22年 (2010)	5,000	26,584	46,284	1,264	79,132
平成27年 (2015)	4,587	26,224	44,821	1,916	77,548
令和2年 (2020)	4,126	25,264	45,456	1,335	76,181

※分類不能の産業とは、国勢調査の定義により「おもに調査票の記入が不備であって、いずれの項目に分類すべきか不明の場合、または記入不詳で分類し得ないもの」を指す。



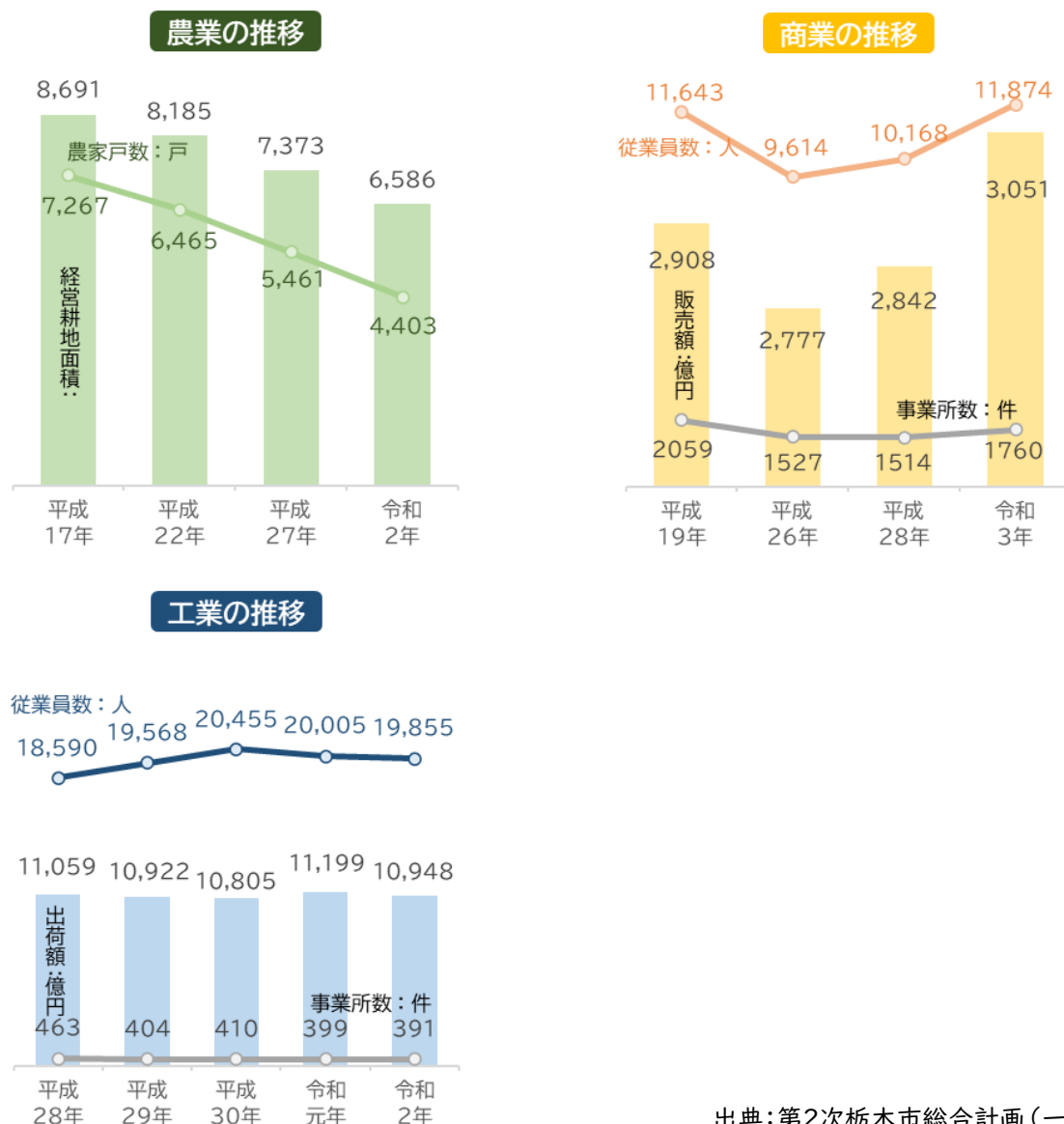
出典：栃木市統計情報

産業別就業者割合

農業は平地に広がる優良な農地を活かした米、二条大麦、大豆などの土地利用型農業や、温暖な気候を活かしたトマト、いちご、ニラなどの施設園芸が盛んです。一方、平成 17(2005)年から令和2(2020)年の15年間で、農家戸数は2,864戸、経営耕地面積は2,105ha減少しており、後継者不足による事業継承が課題となっています。

商業は交通利便性の高い幹線道路沿いに大規模店舗が進出している一方で、既存の商店街における空き店舗等の増加が課題となっています。商業統計、経済センサス活動調査によると、事業所数、従業者数、年間商品販売額のいずれも減少傾向で推移していましたが、平成 26(2014)年から令和3(2021)年の7年間で、事業所数は233件、従業員数は2,260人、販売額は274億円増加しており、回復傾向がみられます。

工業は、全産業に占める製造業の割合が高く、ものづくりが盛んな地域であるとともに、食品をはじめとする特色ある企業があります。工業統計によると、平成 28(2016)年から令和2(2020)年の4年間で、従業員数は1,265人増加している一方、事業所数は72件、製造品出荷額は111億円減少しています。



出典：第2次栃木市総合計画（一部加工）

各産業の推移

(4)観光

本市は、豊かな自然や歴史・文化などの地域資源を活かした観光資源が豊富で、伝統文化を感じられるとちぎ秋まつり、雄大な自然に触れられる渡良瀬遊水地など各地域ならではの行事や施設を楽しむことができます。

本市の令和6(2024)年度の観光入込客数は、5,262,334 人でした。令和元(2019)年度まで横ばい傾向で推移していましたが、令和2(2020)年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、3,485,715 人まで減少しました。しかし、その後4年間は回復傾向にあり、令和2(2020)年度と令和3(2021)年度を比べると 626,310 人(前年比 17.9%増)、令和3(2021)年度と令和4(2022)年度を比べると 707,303 人(前年比 17.2%増)増加しました。

地域別にみると、令和6(2024)年度は栃木地域が 2,387,401 人と最も多く、次いで藤岡地域が 1,313,522 人、岩舟地域が 929,437 人です。平成 30(2018)年度から令和6(2024)年度は、7 年間通して栃木地域が最も多く、2番目に多いのは藤岡地域と岩舟地域のどちらかとなっています。



とちぎ秋祭り



大平町のぶどう園



渡良瀬バルーンレース



つがの里(ハス)



八百比丘尼公園(おびくにこうえん)

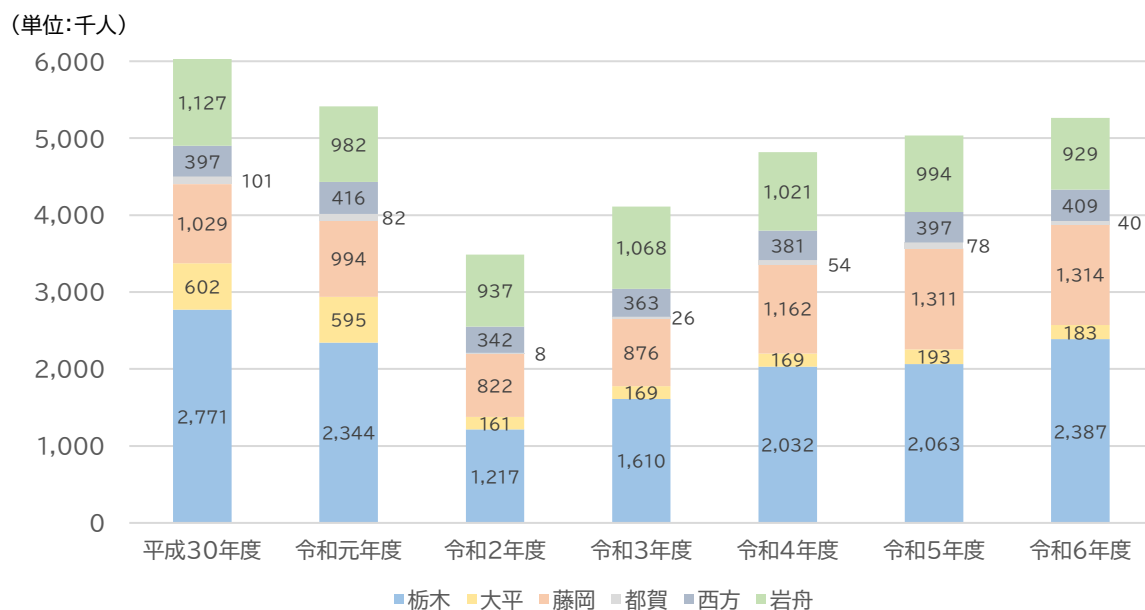


岩船山クリフステージ

栃木市の主な観光資源



栃木市観光入込客数（平成 30（2018）年度～令和 6（2024）年度）



出典: 栃木市統計情報

地域別観光入込客数（平成 30（2018）年度～令和 6（2024）年度）

(5)「栃木市の宝」に関する公開・活用施設

本市は、地域の歴史文化に関する展示等を行っている栃木市おおひら歴史民俗資料館等の資料館、芸術文化に関する展示等を行っている栃木市立美術館・栃木市立文学館があります。また、嘉右衛門町伝建地区拠点施設ガイダンスセンター、旧家の建物を活用した横山郷土館等の公共の施設のほか、民間施設の岡田記念館等、「栃木市の宝」である歴史・芸術・文化・観光等に関する情報を得ることができ、多くの施設があります。

「栃木市の宝」に関する公開・活用施設一覧

施設名	概要	住所
西方民俗資料室	西方地域の民俗資料が収蔵されており、予約制による公開活用をしています。	西方町本城 1
栃木市星野遺跡記念館	星野遺跡発掘調査で発見された旧石器時代と縄文時代の出土品を中心に、遺跡の紹介をしています。また、市内の旧石器・縄文時代の出土品も一部公開しています。	星野町 392-4
星野遺跡地層たんけん館	星野遺跡の発掘調査によって掘られた深さ約 10m の地層を保存し、公開しています。	星野町 504
星野遺跡憩いの森	星野遺跡の発掘調査で発見された縄文時代の建物跡のうち、住居 2 棟と倉庫 1 棟を復元して公開しています。	星野町 400
栃木市嘉右衛門町伝建地区拠点施設「ガイダンスセンター」	江戸末期建築の建物を修理・復元し、伝建地区の観光案内施設として活用しています。施設内で嘉右衛門町地区の歴史や町に伝わる文化財の紹介をしています。	嘉右衛門町 2-11
栃木市立美術館	栃木市ゆかりの作家たちの作品を中心に収蔵し、展覧会とそれに付帯するイベントを開催し国内外の優れた作家の作品を紹介しています。	入舟町 7-26
栃木市立文学館	市指定有形文化財の旧栃木町役場庁舎を修理し活用しています。本市ゆかりの作家を中心とした展覧会の開催や本市の先人の紹介をしています。	入舟町 7-31
横山郷土館	明治時代に麻問屋と銀行業を営んでいた横山家の建物を公開活用し、家に伝わる資料を紹介しています。建物は国登録有形文化財です。	入舟町 2-16
蔵の街市民ギャラリー	江戸時代から商いを営んできた、本市でも有数の善のけどぞう野家の土蔵を、市民の作品を発表する場のギャラリーとして公開活用しています。建物は市指定文化財です。	万町 3-23

施設名	概要	住所
山車会館	県指定有形民俗文化財のとちぎの山車とその関連資料を公開しています。会館前の広場で様々なイベントも開催します。	万町 3-23
栃木市郷土参考館	江戸時代に質屋を営んでいた坂倉家の築約 200 年の邸宅と土蔵を改修し、資料館として活用しています。栃木地域の歴史に関することや民俗資料を展示し、紹介しています。	倭町 4-18
下野国庁跡資料館	国指定史跡下野国庁跡と下野国府跡について、出土品等の展示により遺跡の紹介をしています。資料館南側に下野国庁跡が整備されており、復元した前殿があります。	田村町 300
栃木市おおひら歴史民俗資料館	主に大平地域の歴史文化について、関連資料の展示をして紹介しています。国重要文化財の考古資料等、貴重な資料を展示しています。	大平町西山田 898-1
栃木市おおひら郷土資料館「白石家戸長屋敷」	江戸時代末に建てられた旧家白石家の屋敷と敷地内の土蔵を改修し、資料館として活用しています。茅葺屋根の重厚な屋敷と庭園は見応えがあります。	大平町西山田 900-1
栃木市藤岡歴史民俗資料館	主に藤岡地域の歴史文化について、関連資料を展示して紹介しています。	藤岡町藤岡 812
栃木市渡良瀬遊水地ハートランド城	渡良瀬遊水地の自然・歴史・治水に関する情報を得られるほか、展望台からは遊水地を望むことができます。	藤岡町藤岡 1218-1
岩舟石の資料館	岩船山から石を採掘していた当時の関連資料を展示し紹介しています。建物も岩船山の石で造られています。	岩舟町鷺巣 500-15
岡田記念館（民間）	市内屈指の旧家であり、嘉右衛門町の名の由来でもある岡田家に代々伝わってきた資料が敷地内の土蔵を活用して公開されています。離れとして建てられた翁 ^{おきなじま} 島別邸は粋を凝らしたもので、国登録有形文化財です。	嘉右衛門町 1-12
山本有三ふるさと記念館（民間）	本市出身の文豪でもあり、政治家でもあった山本有三の関連資料を公開しています。 建物は江戸時代末に建てられた見世蔵を修理し活用しており、国登録有形文化財です。	万町 5-3
塚田歴史伝説館（民間）	江戸時代から明治時代を中心に回漕 ^{かいそうどんや} 問屋を営んできた本市有数の塚田家が、栃木地域の歴史に関する展示施設として邸宅を改修し、公開活用しています。建物は全て国登録有形文化財です。	倭町 2-16



栃木市星野遺跡記念館



栃木市嘉右衛門町伝建地区拠点施設
「ガイダンスセンター」



栃木市おおひら郷土資料館
「白石家戸長屋敷」



栃木市立美術館
栃木市立文学館



栃木市渡良瀬遊水地
ハートランド城



岡田記念館



国土地理院地図より作成

「栃木市の宝」に関する公開・活用施設の位置図

3. 歴史的背景

(1)旧石器時代

旧石器時代は前期（約 260 万年から約 30 万年前）、中期（約 30 万年から約 4 万年前）、後期（約 4 万年から 1 万 6,000 年前）と区分され、近年の調査研究によると日本列島に人類が住み始めるのは後期からと言われています。本市は、山地や台地にその時代の人類が活動していた痕跡があり、槍先として使われた尖頭器^{せんとうき}やナイフ形石器など狩猟のための道具と考えられるものが見つかり、代表的な遺跡で星野町の星野遺跡、西方町の小倉水神社裏遺跡^{おぐらみずじんじやうら}などがあります。また、石器をつくるためのチャートという堆積岩を採掘していた平井町の向山遺跡^{むこうやま}があり、後期旧石器の遺跡は12か所見つかっています。



星野遺跡で発見された石核

(2)縄文時代(約 1 万 6,000 年から 2,800 年前)

縄文時代は、草創期（約 1 万 6,000 年から 1 万年前）・早期（約 1 万年から 7,000 年前）・前期（約 7,000 年から 5,500 年前）・中期（約 5,500 年から 4,500 年前）・後期（約 4,500 から 3,200 年前）・晩期（約 3,200 年から 2,800 年前）に区分されます。

旧石器時代に比べ気温が上昇し、海水面が上昇しました。藤岡地域の篠山貝塚^{しのやまかいづか}は、海岸線が渡良瀬遊水地周辺まで及んでいたことを示す遺跡です。

渡良瀬川の流域に、縄文時代の住居跡が多く見つかり、いくつもの集落があったことが分かります。石鏃や石斧などの石製品、土器や土錘などの道具のほかに、土偶・動物形土製品や石剣・石棒など当時信仰があったことを示すものも多く見つかっています。



篠山貝塚

代表的な遺跡として、藤岡地域の後藤遺跡^{ごとう}、中根八幡遺跡^{なかねはちまん}、藤岡神社遺跡などがあります。

近年の中根八幡遺跡の発掘調査から、藤岡地域、岩舟地域で土器、石器の流通があったことや、足利市、佐野市、小山市を含む足尾山地南側に広がる台地上にある遺跡間で情報交換、交易活動があったことが分かってきました。また、精巧な耳飾りなどが製作されて関東全域に流通していたことも分かり、渡良瀬川流域に共通の文化様式があったことが分かります。

(3)弥生時代(約 2,800 年前から 1,750 年前)

弥生時代は、前期（約 2,800 年から 2,400 年前）・中期（約 2,400 年から 2,000 年前）・後期（約 2,000 年から 1,800 年前）・終末期（約 1,800 年から 1,750 年前）の4つに区分されます。

大陸から金属器とともに稲作などの技術が伝わり、関東は中期以降に弥生の文化が広まりました。

本市に弥生時代の集落跡は確認されていませんが、栃木地域大塚町の大塚古墳群内遺跡で、人面付土器が発見されています。この土器は、埋葬した遺骸から骨だけを取り出し、土器に入れ替えて再葬するためのもので、弥生時代の風習が行われていたことが分かります。



大塚古墳群内遺跡出土「人面付土器」

(4)古墳時代(約 1,750 年前から 1,400 年前)

古墳時代は、前期(約 1,750 年から 1,600 年前)、中期(約 1,600 年から 1,500 年前)、後期(約 1,500 年から 1,400 年前)の3つに区分されます。

有力者が各地を治めるようになり彼らの墓である古墳が本市の各地につくられました。

前期につくられた代表的な古墳として、前方後方墳の山王寺大枳塚古墳が藤岡地域にあります。さんのうじおおすづか

中期は、関東で有力者の墓は少なくなり、本市でも大きな古墳は確認できていません。

後期は円墳を中心とした群集墳と大規模な前方後円墳がつくられるようになります。群集墳の代表的なものとして太平山南東山麓の七廻り鏡塚古墳があります。ななまわりかがみづか また、本市の北東部一帯に、基壇を持ち、凝灰岩製切石により石室を造る特徴をもつ「下野型古墳」が見られます。ぎょうかいがんせいきりいし この形の古墳は、壬生町、上三川町、下野市、小山市にある首長の墓と共通しており、各地域を支配した有力者たちが墓の形・儀式を共有し、連合政権をつくっていたことを示しています。

下野型古墳の代表的なものとして、本市から壬生町にまたがるあづま吾妻古墳があります。

(5)奈良・平安時代(和銅3(710)年から元暦2(1185)年)

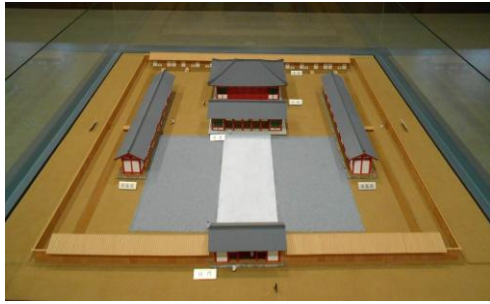
奈良時代は、全国を法律によって支配する国づくりが進められ、全国を現在の都道府県にあたる約60の国に分け、現在の栃木県は「下野国」と呼ばれました。

奈良時代から平安時代にかけて、各地に政治や宗教上、重要な役所や寺院が置かれ、本市に下野国を治める役所であった下野国府跡とその中枢である国庁跡があり、式内社のおおみわ大神神社・おおまえ大前神社・むら村檜神社や大慈寺などが今日まで残っています。

国府付近に都と現在の東北地方にあたる陸奥国をつなぐ幹線道路の「東山道」が通っていました。東山道に役人が行き来するためのうまや駅家が決まった距離ごとに置かれ、岩舟地域の豊岡遺跡は駅家の可能性が高いです。

平安時代は、新しい宗教が本市域でも広まりました。下野国大慈寺の僧道忠は、日本へ天台宗をさいちよう広めた最澄と親交があり、その弟子のこうち広智は、後に天台座主となる円澄や円仁、安慧を率いていました。道忠との縁から円澄らが最澄に入門するなど、大慈寺は初期の天台教団の中で非常に重要な役割を果たしました。

また、日光山を開山した勝道^{しょうどう}は、下野薬師寺^{しもつけやくしじ}で僧となり、「都賀城山」^{つがしろやま}に「華嚴精舎」^{けごんしょうじゃ}を開いたと空海の著書『遍照發揮性靈集』^{へんしょうほっきしょうりょうしゅう}で伝えられています。



下野国庁復元模型



大慈寺 慈覚大師堂

(6) 鎌倉～戦国時代(文治元(1185)年から慶長7(1602)年)

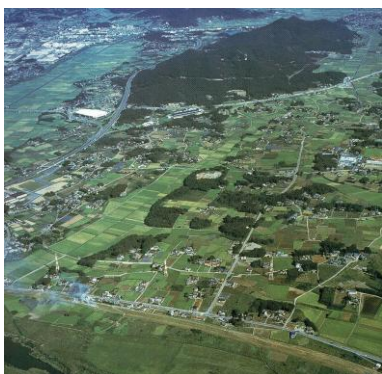
平安時代の支配体制が崩れ、貴族・寺社の私有地である荘園制が広がる中、鎌倉時代から室町時代に在地武士団が成長していきました。その過程で、荘園の支配や権益をめぐり、武士団同士で対立が生じました。

下野国の本市域は、小山氏^{おやまし}、佐野氏系列の小野寺氏^{さのし}と皆川氏^{おのでらし}、宇都宮氏系列の西方氏^{みながわし}などが有力勢力として活動していました。これらの武士団は、鎌倉幕府や室町幕府の政治状況や、幕府内部の権力争い、一族内の権力争いなどに直面しながら、存続を図りました。

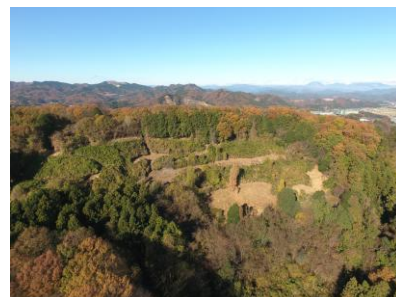
戦国時代になると、在地武士団は各地に防衛の拠点として城館^{じょうかん}や山城^{やまじろ}を築きます。小田原北条氏^{おだわらほうじょうし}、越後上杉氏^{えちごうえすぎし}のような広域を治める勢力や中央勢力の影響を受けて、時には存続をかけて在地武士団が連合し、大規模な戦いにもなりました。

本市には中世の有力者の城跡などが多く残っています。代表的なものとして、岩舟地域の小野寺城跡^{おのでらじょうあと}、大平地域の榎本城跡^{えのもとじょうあと}、栃木地域の皆川城跡^{みながわじょうあと}、西方地域の西方城跡^{にしかたし}などがあります。また、大規模な合戦跡として、藤岡地域に沼尻古戦場跡^{ぬまじりこせんじょうあと}があります。北関東の皆川氏^{みながわし}・宇都宮氏^{うつのみやし}・佐竹氏^{さたけし}などが小田原北条氏の下野国侵攻を阻止するため、連合して戦いました。

皆川氏は栃木地域西部に皆川城を築いていました。戦国時代末期に現在の城内町を中心に栃木城を築き、城下町として整備をしました。これが現在の栃木市の基礎となりました。



沼尻古戦場跡



西方城跡（白鳥昇一氏提供）

(7)江戸時代(慶長8(1603)年から慶応4(1868)年)

この時代の本市は諸藩領、天領、旗本領が入り混じり、陸路と河川を利用した流通により、栃木町・嘉右衛門町とその周辺の農村が発展しました。

正保4(1647)年、日光東照宮へ幣帛^{へいはく}を送る朝廷の使者が通る道として日光例幣使道が整備され、本市に富田宿・栃木宿・合戦場宿・金崎宿が設けられました。各宿の当時の姿はほとんど残っていませんが、現在も日光例幣使道が現在の道路となっている箇所が多くあります。

幕府は利根川の本流を東へ移す大規模な改修工事を行い、こうした河川の整備により舟運による物資の輸送が盛んになりました。

本市に流れている巴波川・永野川は利根川を通じて江戸と直結する水路として利用され、藤岡地域の部屋・新波河岸、栃木地域の栃木・平柳河岸は物資流通の拠点でした。

江戸時代中頃になると、農村部で商品作物の栽培が広く行われるようになりました。これに伴い、栃木町や嘉右衛門町で問屋業が発展し、米・麻・石灰・木材・薪炭・紙などを江戸へ出荷する一方、肥料用の干鰯^{ほしか}やメ粕^{しめかす}、塩、魚などを農村部で販売する経済的な循環が成立しました。



巴波川を利用した舟運（筏流し）
(片岡写真館提供)

江戸時代末に尊王攘夷^{そんのうじょうい}の気運が高まると、元治元(1864)年に筑波山^{つくばさん}で挙兵した天狗党^{てんぐどう}が宇都宮から金崎宿を通り太平山に入りました。各地で豪農や豪商から武器、食料、資金を強奪しながら、栃木宿にも押し入り、資金と武器を要求しましたが拒絶され、逆上した天狗党は火を放ち、栃木宿のほとんどが焼かれる事件が起こりました。

また、慶応3(1867)年、討幕派の薩摩藩は、関東各地で闘いを起こしていましたが、出流山^{まんがんじ}満願寺境内で兵を集め、栃木町の有力商人らに軍資金千両を要求したものの、幕府側が現在の岩舟地域で鎮圧しました。この戦いは「出流山挙兵事件」といわれ、地元の名主が「枕を高く眠り候の儀相ならず、天正以来初の変事にて、実に乱世の心地に御座候」と書き残した記録が現存し、大事件であったことが分かります。

(8)近代(明治元(1868)年から昭和20(1945)年)

明治4(1871)年の廃藩置県により藩が廃され、明治6(1873)年に栃木県が誕生し、栃木町に県庁が置かれました。この時、県庁の敷地に巡らした堀と巴波川につなげた漕渠^{そうきょ}は、現在県庁堀としてほぼ当時の姿で残っています。

明治15(1882)年、栃木町に県庁が所在することに不満を持った当時の宇都宮町の住民が、内務省に県庁移転の請願書を提出し、翌明治16(1883)年に県令が三島通庸^{みしまみちつね}に代わると、宇都宮町の交通の利便性や用地面積を理由として、県庁を宇都宮町に移転することが決まりました。

明治21(1888)年、栃木町に両毛鉄道(今のJR 両毛線)が開通し、大正15(1926)年にバスの運行が開始されました。昭和4(1929)年に東武鉄道日光線、昭和6(1931)年に東武宇都宮線が開通した一方、これまでの流通を支えた水路による舟運は衰退しました。

しかし、道と舟運を背景に江戸時代後期以降、商業の中心地として発展したまちの面影が今も本市の町並みに残っています。

明治 29(1896)年、渡良瀬川流域で発生した洪水により、足尾銅山^{あしおどうざん}から廃棄物等が流出して中下流域の農作物に被害が起きました。大臣視察等も行われましたが、救済措置や銅山の操業停止までは行われず、明治 33(1900)年に、被害にあった住民が国会に向かって歩きながら訴える4回目の「東京押出し」が行われる中、衆議院議員の田中正造^{たなかしょうぞう}が議会に質問書を提出し、政府を厳しく批判しました。

中でも、藤岡地域にあった谷中村^{やなかむら}の被害は甚大で、水害対策として明治31(1898)年に最新の排水機を導入しましたが、明治35(1902)年の洪水で故障し、村は大混乱となりました。明治 36(1903)年に、政府の第二次鉱毒調査委員会で谷中村を含む一帯を遊水地にする案が示され、翌年に国の補助費、県の買収費用が可決されました。明治 37(1904)年に田中正造は谷中村に入り、村復活の運動を展開しましたが、栃木県は明治 39(1906)年に廃村の告示を行い、翌年、土地収用法による村残留民家屋の強制解体が行われ村はなくなりました。

明治、大正時代は近代化に伴う社会の変革が地方に浸透し、生活の利便性などがもたらされた一方、権利や生活が失われる影の部分もありました。近代化に対し、当時の村の名士たちが中心となり私費を投じるなど、私人としての部分も含め、地域へ貢献することを通して乗り越えていきました。



初代栃木県庁舎
(片岡写真館提供)



県庁堀



2代目栃木駅舎
(明治 43(1910)年)
(片岡写真館提供)

(9)現代(昭和 20(1945)年から現在まで)

昭和 20(1945)年の終戦後は、本市も空襲被害や品不足で皆苦しい生活をしていましたが、戦時中から盛んだった下駄生産業は広島県・静岡県とともに三大生産地の1つとして、昭和前半まで栄えました。また、終戦の翌年に、太平山南側の麓で大平下ぶどう組合が発足し、ぶどう栽培が本格的に始まりました。年々、ぶどう畑の整備が進み、昭和 48(1973)年に「大平町ぶどう団地」が完成しました。現在も広大なぶどう畑が広がる景色を見ることができ、ぶどうシーズンに多くの観光客が訪れます。

戦後は河川工事、高速道路の開通などにより本市の町並みは戦前と大きく変わりました。

昭和 14(1939)年度から昭和 26(1951)年度まで赤津川改修工事が行われ、永野川に合流する現在の川の形となりました。一方、渡良瀬川の川魚で栄えた漁業は、水害対策の河川工事等により漁場が衰退し、藤岡地域の魚問屋は昭和 17(1942)年に無くなってしまいました。

昭和 37(1962)年、建設省は渡良瀬遊水地調整池化を計画しました。この工事で渡良瀬川、思川、巴波川の水量を調整し、利根川本流の流量の緩和を実現しました。さらに、昭和 51(1976)年に東京都、埼玉県、千葉県、茨城県に都市用水の供給と洪水の調節を目的とした多目的貯水池である谷中湖^{やなかこ}の建設が行われ、昭和 62(1987)年に完成しました。現在、谷中湖とその周辺一帯は水辺の自然を体感できる場としても利用されています。

昭和 47(1972)年、高速道路の東北縦貫自動車道が開通しました。さらに平成 23(2011)年に北関東自動車道が開通し、本市は陸路交通の要衝としての一端を担っています。

平成 22(2010)年に栃木市、大平町、藤岡町、都賀町が合併し、翌年に西方町、平成 26(2014)年に岩舟町が編入され、現在の栃木市が誕生しました。



東北道高速道路開通当時の
栃木インターチェンジ